

教団新報

定価 1部220円(本体200円+共283円)
予約購読料 1年分 千共 3,962円
紙代のみ 3,080円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
URL http://uccj.org
発行人 網中彰子
編集主筆 嶋田恵悟
印刷所 株式会社きかんし



千葉教会 (東京教区)

ペンテコステ メッセージ

御霊のたもう一致

「弟子たちが歩んだ再結集への道のり」

使徒言行録
2章32～36節



西岡昌一郎

神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。』」だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。』
(使徒言行録2章32～36節)

イエスの十字架の苦難と死は、最高法院と呼ばれたユダヤ議会とローマ総督の権力によってもたらされたものでした。一方、それはイエスの弟子集団の瓦解と離散をもたらす出来事となりました。弟子集団の崩壊はユダの裏切りが端緒となっただけではなく、ペトロもまた三度もイエスを知らないと言って否認したことで決定的なものとなりました。その弟子たちが、使徒言行録に報告されている十二使徒としての再結集(使徒言行録1・3以下)へと至るまでに、その間、彼らは何を思い、何を考え、何を経験していたのでしょうか。

弟子たちには、最高法院やローマ総督に対する怒りと敵意の気持ちはあつたはずですが、しかし、それだけで弟子たちが再結集できたかと言えば、いささか疑問です。

使徒言行録と同じ著者であるルカ福音書では、ペトロは三度イエスを知らないと言ってしまっ

十字架の傷と向き合う

「神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です」(32)。

五旬祭の時に、ペトロが語ったのは、イエスの復活(32)と、約束された聖霊(33)、そして十字架で殺されたイエスが

主、メシアだという宣言(36)でした。聖霊の出来事とは「イエスが主である」とする信仰共同体の始まりの出来事でした(コリント12・3)。十字架でイエスが身をもって受けた深い傷の痛みを思ふごとに、ペトロたち

ペンテコステまでの道のり

「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」(36)。

日本基督教団の成立は、日本の国家が始めた戦争の歴史を抜きにしては語れません。教団は1941年、当時の国家の強い権力のもと、30数派の教会がいきよに統合されて生まれました。政府は、この教団合同をもって、日本のキリスト教が国家の戦争政策に積

極的に協力することを求めました。当時の日本のキリスト者の多くはこの戦争を支持し、これに協力しました。それが日本の教会の責務だと考えたわけです。

このように、教団の成立は、教会としての主権よりも国家の主権が強く働きました。それを「くすしき損理のもとに御霊のたもう一致によって」(教憲前文)と言うのであれば、それは聖霊の神による悔い改めなくして

と至るのです。

弟子たちはイエスの十字架を前に、この世の不条理を感じたでしょう。しかし同時にそれをどうすることもできなかった自分たちの無力さと不甲斐なさ、さらには自己保身から言えば、最後には十字架のイエスのもとから逃げ出してしまった自分たちの非力さと罪深

と気づかされたのです。

間違いや失敗を繰り返すのが人間ですが、そんな自分たちのために、もう一度生きてくださるキリストが歩き始めて行かれたというのです。

「それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました」(33)。

弟子たちは、イエスの

は1969年の沖縄キリスト教団との合同にも通じる事柄でもあります。

昨今の教団総会を見ると、教団は大きく二分化しました。目下、互いが一致できる見通しはありません。しかし、そんな教団でありながらも、各地で頻発する災害や貧困、戦争など、この時代の痛みと傷のために、多くの教会が人的にも資金的にも大きな力を注いできました。また地方を中心とした小規模教会の宣教に関わる連帯のためにも、少なくない諸教会が祈りと力を集めてきました。いずれも痛み

お知らせ
「教団新報」今号を4997・98合併号とし、次号は6月24日に発行します。
総幹事 網中彰子

十字架の深い傷と向き合い、みずからの罪を知りました。しかも、彼らはそれでもなおその自分たちと、もう一度歩き始めてくださったイエスの姿を見たのです。このため弟子たちは主の赦しなくてはあずかれない恵みを聖霊による悔い改めをもって告白することになったのです。

と傷、そして弱さに関わる部分で力を合わせてきたのは確かです。そこに教団としての希望と可能性を見ることができるようになりました。

この傷だらけの教団がキリストの体だと言うのであれば、主の赦しと聖霊による悔い改めと共に、もう一度教団が歩き始めるのはいつなのでしょう。いったんは離散した弟子たちが再結集へと至ったペンテコステまでの道のりを、わたしたちの教団もまた歩き出すことができるのでしょうか。

(千葉教会牧師)

▼教師検定委員会▲

献身者のために祈りをもって仕える

3月24日、教団遺愛会議室にて第1回教師検定委員会が開催された。委員長に清藤淳、書記宮地健一の計7名が、教



後列左より、春原、川島、橋本、町田各委員
前列左より、横山書記、清藤委員長、宮地委員

団の教師を立てるという重いつとめに仕えることとなった。

この委員会は具体的に春と秋の教師検定、また教師転入の審査、面接などの実務を行う委員会である。前総会期からの継続が2名であったため、はじめに教師検定の働きと手続きがどのように行われているか、委員長と担当幹事・職員から、丁寧な説明を受けた。そしてこの委員会の働きがまず受験生のために祈ること、神がお立て

ることが決議され、本委員会はそれを参照し、内容を共有したうえで今回は41総会期の検定委員会方針を踏襲することとした。

その後、教師検定委員会の日程、試験日の確認を行い、今総会期の検定試験課題の作成担当者を決出し、教師検定規則第3条6号対象者（Cコース受験志願者）の認定面接等について協議を行った。

（横山良樹報）

▼宣教研究所委員会▲

今総会期の活動について自由に懇談

3月23日に教団会議室において第1回宣教研究所委員会が行われた。参加者は寺田信一（委員長）、上田彰（書記）、神保望、長山道、野村稔、組織の後、本委員会の役



後列左より、野村、神保、松島各委員
前列左より、上田書記、寺田委員長、長山委員

割について道家幹事より説明があり、委員長からの提案で今総会期の活動内容についての自由懇談がなされた。内容が多いため、事項のみ列挙する。

長期的テーマとして「全体教会の一体性」を諸観点から伝道協力の課題が新しい段階に。教区内互助の戦略的利用やそのための伝道計画の策定／コロナの影響の諸側面。ネット教会、祈祷会におけるネット会議システムの活用、都会と地方の教会の連携や避難者受け入れ側教会の変化などのポジティブな側面への注

目、諸技術の共有／カルト・AI利用など今日的なテーマについても一定の見解を示す必要／学校やキリスト教社会福祉施設における伝道の諸相／内外の教会・教派合同の実例／憲法と教会法の共通点・相違点。天皇制や「政体」理解について／日本のプロテスタント教会が活動主義的である故の短命的傾向、海外教会を見るとき国民性との関連／アカデミックな専門家に研究員として研究委嘱できるよう、宣教研究に関心を向ける奨学金（競争的研究資金）制度

の導入。懇談の後に数点の確認がなされた。第一に、本総会期においても論文集を刊行したい。なお前総会期に公開された論文集『宣教の未来』は各教会・関係機関に配布した後も書店経由で頒布を継続しているが残部もあり、教会などでの活用を呼びかけていきたい。第二に、本委員会の問題意識が総会期を超えて継続しうるよう、問題意識を全教団で共有し、議論の雰囲気

（上田 彰報）

▼東北地方地震被災教会会堂等再建支援委員会▲

360万円を目標に募金をアピール



後列左より、篠浦委員長、高橋東北教区議長、稲松委員
中列左より、奥山委員、熊江関東教区議長、道家総務幹事
前列、網中総幹事

第1回東北地方地震被災教会会堂等再建支援委員会がオンラインで4月6日に行われた。新たな委員会のメンバーとして常議員会より奥山盾夫、稲松義人、篠浦千史が選任され、高橋真人東北教区議長、熊江秀一関東教区議長、網中彰子総幹事、道家紀一総務幹事、星山京子職員が陪席した。最初に委員長として篠浦千史が、書記として奥山盾夫が任を担うことが決まった。

大地震が起り、東北地方地震が過去の出来事となっている感はある。募金目標額を360万円として、各教区総会で、今一度この募金をアピールし、募金を募る努力が必要と思われる。教団3役、総幹事の協力を得て、問安先の教区総会で、協力を呼びかけてもらうこととし、また新たなチラシを作成して、各教区総会へ配布してもらうこととした。

（篠浦千史報）

▼教師養成制度検討委員会▲

教規に基づく「教師論」の検討に着手

教師養成制度検討委員会の第42総会期第1回委員会が、2月7日、オンラインで開催された。出席者は、菅原力招集者、原委員、書記に東野委員、雲然俊美（教団議長）、



後列左より、七條、服部、福島、小宮山、小泉各委員
前列左より、東野書記、雲然議長、菅原委員長、小林委員

ため、数名の協力委員を補充することとした。また前総会期、教規に基づく「教師論」作成のために設置した小委員会が、引き続き、小泉健、七條真明、服部修の三教師に委員を委嘱し、教師論の最終稿作成のため本委員会と合同で検討に加わってもらうこととした。

当委員会の経緯と課題について、第37総会期、石橋秀雄教団議長の諮問を受けて設置された「教師養成制度検討会議」が2総会期にわたる検討を経て教団の教師養成についての「答申書」を提出したところから始まり、第39総会期、「答申書」

の具体化のために設置された「教師養成制度検討委員会」が活動を継続してきたことを確認した。また教師の養成を担う関係神学校の訪問と懇談、教師の検定・継続教育を担う委員会との懇談を経ながら、教団がどのような教師を立てようとしているのかを明確に示す必要と責任があることを認め、「日本基督教団の教師論」作成に取り組んできた経緯を共有し、今後の進め方を検討した。

（東野尚志報）

年金局よりお詫び・訂正

新報4995・96号6面、「隠退教師を支える運動」1段12行目、「2020年度」を「2022年度」に、お詫びして訂正いたします。

◆宣教委員会◆

宣教方策会議、青年大会を開催

第1回宣教委員会が4月18日に教団会議室において開かれた。

委員会組織がなされ、委員長に岸慶秀、書記に小宮山剛、「障がい」を考える小委員会の委員長に小林克哉を選出した。

委員として具志堅篤、常設専門委員会から、「伝道」中西真二、鈴木善雄、《教育》横山ゆずり、堀川樹、《社会》柳谷知之、真壁巖、加えて大島義孝幹事で構成。また陪席は自主活動団体から《全

とオンラインの併用)によつて開催する。

また、今期取り組むべき課題として、第41総会期宣教委員会に提出され

中村利成(隠退教師)

福井幸夫(無任所教師)

小出 望(下石神井教会)

主任担任教師)

就(主)北畠友武

就(主)森分信基

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

就(主)林原泰樹

就(主)山本孝根

